

# 白金葎

2月号



平成 30 年 2 月発行 第 84 号

金蔭定例会案内（於て アビスタ）

定例会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

三月十六日（金） 正午～二時第二番題…鷹化して鳩となる、春田

四月二十日前後午後一時～五時…四谷地域セを予定

五月十八日（金） 正午～三時 兼題…未定

兼題句参考句三月十六日分（鷹化して鳩となる、春田）

鷹鳩と化しぞんぶんにたむろせり

鷹化して鳩尾にあり日の剣

鷹鳩に化して青天濁りけり

春田より春田へ山の影つづく

野の虹と春田の虹と空に合ふ

みちのくの伊達の郡の春田かな

榊未知子

五島高資

松根東洋城

大串 章

水原秋櫻子

富安風生

月例会会報（<sup>18</sup>／2／16 10名欠3 針供養 黄梅

光成高志

コクーンタワーより和服出て針祭る

まち針が豆腐に咲いて針供養

御朱印は綿のおばばや針供養

黄梅や沼のひかりと風の音

ご開帳村の仏の修復成り

松村幸一

鉢で売る黄梅暗き朝市に

佐助の夕つくづく凄し針まつる

針供養して戦災の供養して

千人針のその針供養せしことも

頼りたる妻に逝かれぬ迎春花

佐藤宏之助

針供養遊女の墓を先づ拝む

太宰碑に灌ぐ津軽の寒造

地吹雪の待合室に伝言板

初句会鼻へ酸素の管通し

黄梅の下が卒塔婆返納所

吉羽多美子

黄梅のぬれて輝く雨上り

春耕や円空仏を守る村

晴天や男もまじる針供養

節分の豆に鳩きて椋鳥のきて

春めくや新しくして庭の下駄

増田陽一

春暁の妻の寝息を老後とす

磯目健二

縄文の焦げ痕凍てて貝化石

黄梅は匂はず会ふも別るるも

皆既蝕月天心に煮凝りぬ

ボタン付け位はできて針供養

少し汚れ胸底にある残り雪

光みち

風邪で臥す家の垣根や迎春花

黄梅の散り初め病癒えしかな

笠針の太きも立つや針供養

笠針もある山寺の針供養

沼縁の土手道に散る迎春花

武者昭七

畳屋の太き針刺す針供養

針供養帰りに覗く閻魔堂

立春の没日トマトの色をして

漱石の書齋に払子春の蠅

拝殿に磁石備へて針供養

仲本興正

無縁坂下れば春の水光り

潮騒や待春の窓の薄明

母の指一針ごとの針供養

荒海や賽の河原の六地藏

蠟梅の匂ひが誘ふ夢十夜

飯田孝三

抽斗に母の小物や針供養

大川の細波ばかり針まつり

窓に寄る西施が影や迎春花

歳月のしづかに光る黄水仙

立春の雪に羽ばたき白鳥は

飼犬死んで十年春の雪積り

黄梅や術後三年事もなく

万太郎の句歳時記になし針まつり

次郎逝き太郎の杖もつ雪まろげ

田宮敦子

黄梅や宝登山走る子等の声

針供養。パッチワークの手提げ持ち

黄梅や子供乗らないベビーカー

黄梅やべつこう飴を持つ子供

立春やシヨベルローダー唸りをり

浅野正美

淡島堂着物姿で針供養

雪の道。ペンギン散歩人の垣

亡き人が育てた黄梅蕾もつ

小雪舞う顎まで露天湯に浸かる

御仏が見守る堂に針供養

倉田紀子

此やこの広葉打つたり春の雪

春の夜や藤村鼻頂の炉を守る（小謠

ボール蹴る少年ゆさぶる冬の山

こんぺいとう買ひし男や針納め

亡父にある時計・眼鏡や春彼岸

一句鑑賞

光成高志

立春やシヨベルローダー唸りをり

敦子

「ブルドーザー工事現場の鬼やらふ」が誓子選の朝日に載って喜んだ昔を思い出し掲句を選んだ。節分の翌日が立春、別に唸っているわけではないが、シヨベルローダーのエンジン音が高く聞こえるのは立春の季感を作者が持つているからです。力強い佳句です。

節分の豆に鳩きて椋鳥のきて

多美子

節分の豆まきが済んで皆が帰った境内の豆を啄みに鳩が来るし、椋鳥も来ます。直前の喧騒とした豆まきが止み静寂を取り戻した鎮守の森の描写です。

拝殿に磁石備へて針供養

みち

淡島堂の針供養の描写です。備えてある大きな磁石に目を止めた特異な針供養の句です。物に焦点を当てて針供養を描写しているのです。こぼれた針を拾う道具としての磁石、安全第一の現代思想を言い得ています。

黄梅の下が卒塔婆返納所

宏之助

黄梅は連翹と同じモクセイ科の落葉低木です。今年は例年に比べ寒い日が多く開花が遅れています。掲句、黄梅と卒塔婆との取合せです。明るい黄の花は匂わないけれども枝垂れて枝に満つ様は追善供養の用を終えた卒塔

婆に共鳴しているように思います。

### 荒海や賽の河原の六地藏

昭七

この句は、荒海や佐渡に横たふ天の川の地上版と云える佳句と思います。舌頭に千轉すれば段々内包する精神世界が髣髴とします。荒海の上五から日本海の冬怒濤が浮かび上り、或いは天の川のかかる秋の日本海が思い浮びます。賽の河原は、親に先だつて亡くなった子供が石積み之苦を受ける三途の川の手前にある河原。子供は親のために石を積み上げて塔を作ろうとするが、地獄の鬼がやってきてそれを崩していき、子供はまた一から石を積み上げる。その報われぬ努力を救うのが地藏菩薩です。六地藏の廻りに小さい地藏が無数に立っている賽の河原の光景は凄まじいものであるが、子供の魂を救済する六地藏に焦点を当てた句の切の鋭さは、加賀の潜戸の光景からの発想という作句の弁をとうに越えています。

一句鑑賞

磯目健一

### 針供養遊女の墓を先づ拝む

宏之助

縫い針など持ったこともない遊女と、市井の平凡な私たちの針供養という取り合わせの面白さ。かつての色街近辺にある寺で営まれた針供養。参道途中に薄幸の遊女の合葬墓があつて、それにまづ手を合わせてから本堂の針供養へ行くのである。芭蕉と一つ家に寝た漂泊の遊女

なら己が襟褸を綴る針も携えていたかも知れないが、遊郭の女は日常裁縫などとは無縁だ。その点で針供養をする女たちとは全く生き方が異なる。句にはあの世とこの世、死者と生者の対比もあつて、一抹の哀切さが漂う。頼りたる妻に逝かれぬ迎春花

幸一

春に先駆けて咲く黄梅花の花を毎年妻と眺めては、一年の夢を語り、互いに力にし寄り添って生きてきた。今年も黄梅は咲いたが、何十年間も共に春を迎えた、その妻はこの世を去つて居ない。迎春花の明るさが、残された者の深い喪失感を際立たせたものになっている。

### 抽斗に母の小物や針供養

興正

絶えて開けて見ることなかつた抽斗から亡き母が日常手にしていた種々くさくさが出てきた。そのなかに裁縫の道具もあつて、それを愛用した生前の立ち居のさまが思い浮かんでくる。折から針供養が寺で催されている。亡き母の遺した針の針供養を済ませ、あわせて亡母の冥福を祈りたいと思ひ立つのである。

### 千人針のその針供養せしことも

幸一

戦争が身辺日常にあつた頃、街頭で愛国婦人会の白襷を掛けた婦人たちが道行く人々に赤糸の縫い玉を白布に点綴してくれることを願つた。そうして完成した赤い布は敵弾から身を護る神通力があると信じられ、応召して

戦地へ向かう夫や兄弟、隣人に贈られた。銃後のひとびとが一針ごとに兵士の武運長久の祈った、その針を供養したことも遙か遠い時代にはあったのである。

黄梅や沼のひかりと風の音

高志

無縁坂下れば春の水光り

昭七

先の句は早春の手賀沼を望む坂の風景。後者は隅外の

「雁」で有名な池之端の無縁坂から見ると不忍池の眺め。

どちらも前方に春色の光る水の広がりがある。鮮やかな黄梅の花、そよ吹く風の音を聞き、天地の日のひかりを全身で体感しつつ裏道っぽい坂を下って行く。早春の瑞気が満ちた印象派の絵画を観るような句である。

黄梅は句はず会ふも別るるも

陽一

古来、水のように淡々とした交わりこそ望ましいとされてきた。梅の馥郁と香ると異なり、同じころ咲く黄梅の花は全く匂わず淡々と咲く。その黄梅のもとで逢い別れる若く淡き恋。会うは別れの初め、黄梅下の会者定離こそ淡々として、しかも長く忘れ難いものであろう。

一句鑑賞

増田陽一

千人針のその針供養せしことも

幸一

「針供養」の兼題で「千人針」が出てくるところ、この句座にある年輪を感じる。戦中、「大日本婦人会」などと櫛にした婦人たちが街頭に立って道行く人に白布に赤

い糸で結び目を一つづつ作らせた。戦場の兵士が身に着ければ弾除けになるといふ、千人の祈りを込めたいらしいお守りは効いたであろうか。供養のところに戦死した兵士への祈りもこめられているようである。

まち針が豆腐に咲いて針供養

高志

大宰碑に灌ぐ津軽の寒造

宏之助

若年の津島修治は故郷金木の旧家ではさぞ困り者であったろうけれど、作家が故郷に抱いた愛憎は深くそれゆえの名作も多い。文豪に数えられた後は郷土最大の誇りであろう。掲句の作者はそのような感慨と読者の愛で特に地元産の寒造りを選んで餞したという。

飼犬死んで十年春の雪積もり

孝三

ペットを失うのは身内の死と同じように悲しみを残すものらしい。もう十年にもなるのか、と愛犬の思い出を心に浮かべながら春の雪は降り続く。

漱石の書齋に松子春の蠅

みち

晩年を暮した早稲田南町の「漱石山房」跡に復元されているそうである。そこで大きな「松子」が目についた。参禅した寺からのものか、和洋漢の書籍を背にした漱石と松子の取り合わせは異様でとても面白い。「春の蠅」が決定的で、蠅を払う文豪の髭が浮かぶ。

無縁坂下れば春の水光り

昭七

坂を下りて行くと不忍池に水が光り、ああ春だなと思う。もう「雁」は帰ったか、などといういろのことを連想もさせる。「下れば春の・・・」と語調が好くていかにも季節を感じさせる。

一句鑑賞

武者昭七

少し汚れ胸底にある残り雪

陽一

胸底にわかまる「少し汚れた思い」とは青春の日の名残りのそれであろう。それは中也の「よこれちまった悲しみ」にも似ていようか。残りの雪はなかなか消えがたいものである。

黄梅は匂はず会ふも別るるも

〃

出会ったのも別れたのも黄梅の花のさかりの時期。しかしはたして黄梅は匂っていたのだろうか。あのひとのにおいだけが回想をよぎる。二句ともに青春の日のかたみとみた。

黄梅の散り初め病癒えしかな

健一

病の癒えた日それを見届けたように庭先の黄梅が散り出した。自分を慰め続けた黄梅だけにもっと咲いてほしいと願うのに。上の句に親しき者との惜別のおもいが滲む。

漱石の書齋に弘子春の蠅

みち

弘子は禅僧が湧きあがる煩惱を払いのけるのに使ったという仏具。漱石も山房の隅に置いて愛用したものか。作者はその大きさに驚いたという。煩惱のかわりにうるさい春の蠅をおいたところが俳諧か。

千人針のその針供養せしことも

幸一

千人針を縫ったその針。その針の供養をしたこともあるというのである。戦場に赴く兵士がそれを身につければ弾にあたらぬという呪的な民間信仰があった。しかし兵士は帰らず千人針を縫ったその針だけが残ったのだ。繰り返してはならぬ悲劇である。

窓に寄る西施が影や迎春花

興正

窓近くに咲く迎春花にふと絶世の美女西施の影を見たのである。芭蕉は雨に濡れるねぶの花に西施のおもかげをみたけれど作者の見た西施はいかなる影のぬしやら。地吹雪や待合室に伝言板

宏之助

吹き荒れる吹雪のなかの小さな駅舎。使い古した伝言板だけがいまだにかたことと鳴る僻村の冬だ。そんな景色もいまはなつかしい。

一句鑑賞

飯田孝三

千人針のその針供養せしことも

幸一

「千人針」はかつて出征兵士の弾除けの御守。結「せ

しことも」の胸懐がすべて。一読、目頭をおさえる。「千人針」の主は「自身、今に豊饒、大正生れの老婦還兵。方々駆け廻ってしつらえた千人針を征く息子の肌身につけさせた母の心情に泣くのである。『そうだ、「その針」もこうして供養したに違いない。破調、敢えて畳む「の」』の」の措辞に、切々、亡母追慕の息が籠る。

### 春耕や円空仏を守る村

多美子

冒頭「春耕」が輝く、「や」が働く、鈍彫りの円空仏を祀る村である。「守る」が臍。「春耕」と相響き、春耕満ちる村の佇まいをありありと目に見せ、かたがた村人の心情を語るのだ。春耕は機械力頼み、耕耘機の空を白い雲がゆく。若者の減った村の野面は明るく、そして物さびしい。

### 漱石の書齋に弘子春の蠅

みち

漱石山房探訪の吟行句。書齋の棚の弘子に目を止めた立坐の詠。「弘子」はもと印度で蚊や蠅を払うのに使った具とか、日本では禅僧が持つ煩惱を払う標識。頭痛もちの文豪にふさわしい取合せだ。「面白い。一句の調べは明るく巧まぬ俳諧を奏でる。「春の蠅」が絶妙の座り。

### ボタン付け位はできて針供養

陽一

昨今は小学男子も教室で雑巾を縫わされたりする。男子厨房に立たぬ時代に育ったってボタン付けぐらいはや

れる。だが掲句は、それをいうのではない、男混りの当世風針祭を詠むでもない。悦子夫人を亡くされ、ボタン付けなんかで、今更、針を手にするにつけ在りし日のあれこれが目に浮かぶのである。「針供養」は悦子さんへの悼みにも繋がるだろう。残された男の心情を秘める一句である。

### 一句鑑賞

光 みち

### 雪の道へペンギン散歩人の垣

正美

旭川動物園に行かれたとのこと。ペンギンの散歩という行進が有名で観光客がそれを目当てに行くとか。ペンギンのお出ましに人垣ができて、人声が聞えてきそうです。ペンギンはモーニング姿で皆胸を張って短い脚で歩く姿にはユーモアがあつて観客は皆目を細めます。色々想像できてそれだけで十分楽しい句です。

### 俳窓評論纂

\* 212の朝日俳壇自然詠は以下の4句、薄氷の山湖を風の鳴り渡る ☆考える人の隣の雪たるま 天空をあまねく統べる寒の月 なおも雪募りて昏るる山の町 ☆マークは大串章、長谷川權の共選。この句は佳句だ。

\* 姉から送られた中国新聞福山版1.16、1.17、1.20に井伏鱒二とふるさと①②④が載った。古里の旧友との交流や書



簡が紹介された記事。高田類三さんへの書簡は一六二通あった。御息が最近見つけた。鱒二は上京時の心境や失恋時の痛手も告白していて「内面を語らない作家」の若き日の記述を専門家は驚きをもって受け止めた。高田さんは歌人であったが、鱒二に一首も見せたことがない。鱒二が二三歳であった一九二二年に早稲田大を休学して因島に身を寄せた。翌年上京するも復学かなわず退学、翌年に「幽閉」を発表、その六年後の三二歳に「山椒魚」を発表。因島での苦悩の日々が後の文豪の出発点となったとか。「黒い雨」は神石高原町に疎開中に出会った重松静馬がモデル。彼の被曝日記が送られて来て「実際のことを知らない」と執筆を迷った。書く決めてから広島を訪ねて被爆者を取材。五〇人以上の話聞いた。重松氏の養女の夫文宏氏（81）は今も黒い雨の舞台を案内したり、昨年11月に発足した「黒い雨」プロジェクト実行委員会の会長として映画ドラマの鑑賞会を計画している。

\*陽一さんから小熊座へ投句した特別作品のコピーを頂いた。よくないよという言葉があったがランダムに抜いてみた。

熊楠の粘菌も冬のうちきかな  
白鼻プロコフイエフの羽ばたきす

ここに生れ寝藁引き摺るごりらの仔

ゴリラ冬日象形文字を頭に詰めて  
枯蓮に鴨の混みあふ日暮かな

二句目のプロコフイエフはロシアの作曲家であり、ピアノ協奏曲が有名である。この曲をよくお聴きになった証であろう。人は違うが、ラフマニノフのピアノ曲を還暦を自祝してリサイタルを開いた三菱の陸奥五郎さんを赤坂まで聴きに行ったことを思い出した。私は何が何だかわからなかったが、連れて行つたちるさんは大分間違っていたよ、美輪明宏が来ていたよ、と言った。むしろこれに驚いたことを覚えていいる。これは蛇足です。

受贈誌（平成30年2月号）

寒戻りことに照葉樹林帯（彩139号）平野ひろし

限界集落春よ春よと水奔る（〃）

雉子鳴くかはたれ時を切つ裂ききて（〃）

躍り出づ磯の白波春満月（〃）

葉に乾く白き涙痕芋の露（〃）

トロコに雨脚激し紅葉山（〃）

野良仕事一服の場所石路の花（〃）

貼つ終つて障子陽射しをよく通る（〃）

大部屋の欠伸ため息冬の雨（〃）

切つ先に光りあつめし垂氷かな（東京ク2月）

〃

遠藤恵子

小林治世

梶原宮子

木村恵子

鈴木正邦

渡部和夫

璃子

春雪やはらりと剥けし茹で卵 (一)

理佳江

電柱を狙ふひとりの雪合戦 (一)

武士

早春の社に呼ぶ声ちよつと来い (一)

晴夫

紅梅や漆黒甲冑へと映ゆる (一)

万世遊

石仏の跣坐する膝に花薺 (一)

文男

こだま

冬波の白の浮き立つゴツホの絵 (彩 139号)

光成高志

手術室吾を覗きつマスクの目 (一)

〃

賢治童話 注文の多い料理店

武者昭七

二人の若い紳士が狩猟に出かけるところからこの物語ははじまります。「すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで白熊のような犬を二匹つれて」という格好です。イギリスの兵隊の恰好も、ぴかぴかする猟銃も白熊のような猟犬も当時急速に数を増してきた都会の金持ち階級のステイタスシンボルです。二人は「専門の猟師」(マタギでしょうか)をやとつて深い山に入り込み鳥獣をしとめて楽しんでいるのです。一方の「猟師」の恰好は「蓑であんだ帽子」にささやかな「団子」の弁当という古風ないでたちでその落差は歴然とされています。ぼくには「なめとこ山の熊」の小十郎が浮んできます。楽しみのために生き物を狩るという無益な殺

生をおかす人間と、殺したくもない生き物(彼らのあいだには友情さえつうじあっているのです)をこころならずもころさなければ暮らしたたないというなんという落差のおおきさ。それが紳士と猟師、都会と地方の当時の実状です。入り込んだ山が「あんまりものすごい」ので二匹の犬は泡を吐いて死んでしましますが、愛犬の死さえも二人にとつては経済的損失のたかでないという非情さです。ふたりは損失の額をきそいあうのです。そのとき風が吹いてきてあたりの草木がざわざわとなります。風は賢治の場合、異空間(異界)からの不気味な信号です。

二人はそれに気づきません。現実を超えた世界(幻想世界)が二人を取り囲みだしているのです。二人は急に空腹を覚えてうしろをふりかえると一軒の立派な「西洋造り」の家がありました。腹の空いている二人はいぶかしく思いながらも中に入ります。そこが山猫の待ち構えている「注文の多い料理店」だったのです。山猫の狙いは山の侵犯者である都会の紳士を西洋料理に仕立て上げて食べってしまう事でしたが二人にはなによりも嬉しい食事の提供の場とみえたのです。部屋の扉にはいろいろと細かな注文が書いてありますが二人は自分に都合のいい勝手な解釈をしてどんどん中へすすんでいきます。気づいたのは「すぐたべられます」という言葉を見た時です。「すぐ

食べられる」のは二人の腹におさまるはずの西洋料理ではなくて、実はなんと自分たちだったのです。うしろには山猫の青い目玉がのぞいています。「さあさあ、なかにおはいりなさい」とせきたてます。「おなか」は部屋の「中」ではなくて山猫の「お腹」の意味です。「二人は泣いて泣いて泣いて泣いてなきました」と賢治は書きます。ひどい錯乱ぶりです。このへんは一番愉快な部分です。

二人を救ったのは突然飛び込んできたあの白熊のような犬です。死んだはずの犬が生き返って山猫に挑みかかるなんて現実にはありえない話ですがここにはあるいは賢治の死生観もからんでいるのかもしれませんが。賢治の幻想世界（異空間）では生と死とはいつも通じ合っているのです。あるいは深い山の靈気が白熊のような犬にふたたび生氣をふきこんだのかもしれませんが。また風がどくと吹いてきて気がつくとき室は煙のように消え二人は寒さに震えて草の中に立っていました。異空間の消滅です。見れば上着や財布や靴はあちこちの枝にかかって揺れています。二人は幻想世界からまた現実世界に投げ返されたのです。専門の猟師も戻ってきて一緒に「団子」を食べ二人は途中で十円だけ山鳥を買って東京へ帰りました。得たものは団子と十円の山鳥とはなんとも皮肉なことです。東京へ帰っても二人の紙屑のようになった顔

だけは元通りにはなりませんでした。自然の侵犯者としての永遠の烙印だったのでしよう。「注文の多い料理店」は賢治の最初の童話集におさめられています。執筆は大正十年十一月、二十五歳。刊行は十三年十一月。作品の題名を本の題名に持つてくるなど賢治には愛着の深い自信作というものだったのでしよう。虚栄に満ちた都会の近代生活とそれに浮かされた上流階級がここでは作者によつて徹底的に揶揄されているのです。(P.81-82)

芭蕉のかるみ以後 (40)

光成高志

鉄くろがねの弓取タケ猛いき世いでに出よ

角

前句の豪石な霧困くろがね気を受けて鉄くろがねの大弓を引くほどの弓取がこの猛き世に出でよと転じた。弓取は無論武士のことで、元龜天正から百年、島原の乱から四十年後の天下泰平の世であったが、それに物足らぬ氣質は残っていたのである。

虎フトコロ懐ヤドに姪やるあかつき

蕉

虎が懐ふところにみこもった夢を見た暁。その虎のような弓取をみこもったのだという付句。山月記の虎は人が虎になった話でこれとは違つた。

山寒しずみく四睡よこの床とこをふくあらし

角

豊干禪師、虎と共に睡り、傍に寒山拾得また睡る図に題いて四睡という。蓋し天地静寂、禪界の妙悟証空の帰着を示したものだ。つまり禪の窮極の悟りを表している。前句の虎を受けているし、山寒くは寒山を利かせた季語となっている。ふくあらしは「龍吟雲起 虎嘯風生（周易） 龍吟ずれば雲起り虎嘯けば風生ず」の禪語から常識的に出てくる言葉だ。

うづみ火消て指の灯 きえ ひとしび

蕉

精舎の中を歩くのにダツバマラブツタが指に灯をともしして修行者の床をしつらえたという下りがある。「仏教説話大系」の積尊の弟子達の項に見られる文章。既にうづみ火も消えた深夜に指に灯を灯して僧が修行をしている。四睡画の懸つた床をふくあらしの中でも指に灯をともしして修行をしている山僧もいると付けた芭蕉の心持を想像する。

下司后朝をねたみ月を閉 ゲ ス き さ き あ した とう

角

下司后というのは、布衣を来た庶民の女性がたゞ美貌のゆえに後宮に召されたという意味を一寸俗世の言葉借りて作った基角の言葉であろう。朝になるのをねたみ月光を遮っているという情景である。後朝を基角流に解釈したのだ。源氏物語は目をふれていないらしい。

西瓜を綾あやに包ムあやにく

全

当時西瓜は下賤の食べものであり、後の食べるようなものではないが、庶民出の后が人目を憚つて綾あやに包んで持って来させたが、形や重さで西瓜ということがすぐわかっつてしまい、おあいにくさまというところ。

哀あはれいかに宮城野のぼた吹凋しんぼるらん

蕉

宮城野と言へば、萩の名所で、鴨長明の「無名抄」に書かれている。これによれば、歌人として知られた橘為仲が陸奥守の任を終えて京へ戻るときに、宮城野の萩を12個の長櫃に収めて持ち帰ったところ、大勢の人がその土産を見るため、二条の大路に集まつたという。萩の歌枕となつている宮城野の萩が吹き凋しんぼれるというあわれをぼたという食べもののあやにくさに響かせた。歌枕の宮城野のぼたという雅俗の対比が綾あやと西瓜の対比に呼応しているのだ。

みちのくの夷エしらぬ石臼

角

みちのくのえぞはぼたを石臼で搗くのを知らぬだろう。それがあわれいかにというのである。頼朝に「みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよつぼのいしぐみ」という慈円への返歌を踏まえてできた付句である。陸奥みちのくの岩手や信夫のぶではありませんが、思つていることをいわずに我慢しているあなたのお心は、わ

たしにはわかりません。思っていることはすっかり書き尽くしてください。壺の碑いしなみならぬお手紙で、という掛詞が巧みであり、頼朝と慈円はこれがきっかけでウマが合ったとや。

武士の鎧の丸寐ものままくらかす

蕉

これは分かりやすい武士ものぶの句。みちのくの夷征伐の戦陣で鎧のままごろ寝をしている武士に夷の娘がそつと枕をあてがってやる。石臼も知らぬ夷にも人の情けはあるというものというところまで前句を受ける。

八声やこゑの駒の雪を告つげつゝ

角

朔北の軍営の夜明けの景を以て応じたものという。思ひかねこゆる閑路に夜をふかみ八声の鳥に音をぞそへつる（千載和歌集 十五恋 前中納言雅頼）という歌もある如く暁を告げる鶏の声は詩歌によく読まれてきた。ここでは軍営であるから駒と受け、駒の嘶きが雪を告げるといっているのである。

詩あきんど花を貪サカサル酒債サカサ哉

全

名残の花の座である、前句の雪を落花の雪と見立てて、発句の年を花に変えただけであるが、発句に比べればはるかに自然な発想である。花に浮かれて酒債のかさむのもかまわず放浪する吟遊詩人の姿を描いて自ずから前句に見合っている。近代では山頭火だ。

春湖日暮しゅんこて駕ノル興ニ吟

芭蕉

芭蕉も負けず脇句の形式を置き換えて基角に付き合ったもの。きらきら春光に光る湖面も日暮れて興に乗った楽しい貴殿との吟詠もここでお終いになるのだなあ。

以上の両吟歌仙でもつてこの虚栗はしめくくられる。芭蕉の跋文はその後に続く。

お便り広場（到着順、敬称略）

寒中お見舞い申し上げます。記録的な寒波が到来していますが、お元気ですか。私方変わりなく過こしております。この度、ハガキ句七〇報を送っていただき有難うございました。楽しく見させてもらいました。「白金霞」もいただき読んでいます。最近、子どもが使っていた学校の副読本「要解小倉百人一首」を見つけ、少しずつ読んでいます。当時の古人のことはや表現を通して感情を理解すればと思っています。これからも寒い日が続きます。ご自愛ください。

128 昇

雪が降るみたいで寒いですね。腰や風邪は大丈夫ですか？七五歳以上の車の運転が危険とテレビでみて、心配しています。車返納は無理ですよ。どうぞタクシー使ったり電車使ったりして下さい。DS東京駅ナカで流行の

バターサンド食べてね。

(128 ちる)

凍った雪の上を渡って来る風の冷たさと裏腹に日ざしはもう春のような日々ながら、もう一度雪の予報もあり、一度で結構と思っております。一月号白金葎ありがとうございます。○朝日俳壇賞の自然詠についての評論僭越ながら私も感ずるところあります。みち様の「歯固めのするめの足をひとつづつ」に、「歯固め」を「存知のことに嬉しくなりました。それこそ一つづつ消えてゆく言葉を知らない人の多い中、さすが俳人と敬服です。○ハガキ句七〇報、賀状できれいに上手に編集され中央の新年詠楽しく拝見いたしました。○朝日新聞紙上の読者の投稿で「白樺派の文人らの集った緑多い街」で我孫子認識が進みました。中でも杉村楚人冠邸が残っていると云うことに若き日にとでも好きだった杉村楚人冠の文章を今思い出せなくなりましたが、嬉しくなりました。その頃は徳富蘆花の自然と人生、漱石の虞美人草等々読みふけりました。今老いて読書力もおとろえましたが、藤村の詩、晶子の詩、自然と人生の一こま覚えているものもありです(時々ロすさむ)。我孫子すばらしいところなのですね。戦争中に軍隊があり、召集された人に面会するために電車の窓から乗って我孫子に行ったことがあります。同行した人も今は忘れましたが、それが私のアピコの記

憶です。

長屋瑠子二〇一八一月二十九日

「白金葎」一月号拝掌しました。我孫子のほうでそんな縁があつたと驚きですね。木村さんの親戚でしょうかね。「山川草木」にそのような感動して頂けるとは師匠冥利に尽きます。今年は格別な寒さですので高志さん、みちさん共々ご自愛のうえ御健吟下さい。近作 江川太郎左衛門邸 寒むや寒む土間の火の臭煤の臭 (131 ひろし)

しばらく失礼しています。お変わりありませんか。暦の上では春を迎えましたがまだしばらくは寒い日が続きそうです。ですが梅のつぼみがほころび始め我家の臘梅も黄色い花を咲かせています。季節の変化を感じながら春のスタートだと感じます。白金葎正月号受けとりました。ありがとうございます。皆さんほんとに良い句を寄せていますね。わたしなぞ出る幕もなさそうです。私は元気で年を越しましたがもう二月になってしまった。高志の体調はいかがですか。あまり無理せず心にゆとりをもつて暮らして下さい。敏子さんに宜しく。

この寒さ向いの山の色変り

(2.7 健三)

お母様へ 少しですが、ぽんかんと安納芋を送ります。気温が低くてまだ体にこたえますが、あと一か月がんばって下さい。私もがんばります。(2.8 ちる)

高志おじさん敏子おばさんお元気ですか。ぼくは毎日

仕事をがんばっています。瀬戸田の蜜柑と八朔を買ったので少しですが食べて下さい。今年は特に寒いので風邪引かないようにして下さい。また会いましょう。(21) 健

きびしい寒さが毎日続きます。お元氣ですか？私は元氣で何かと忙しくしています。家事もゆくりゆくりでないと出来なくなり日々々々があつと云う間に過ぎていきます。二月四日に新春弾き初め会民謡の先生の会の友達にさそわれて行きました。去年の五月頃から公民館に民謡を習いに行くようになり始めて私はそんな場所に行き感動しました。皆様ほんとうにがんばっていらつしやるのを見て同じ人生であんなに楽しく自分の好きな事をしてながらそれも一生、ただ生活に追われて生きるのも一生・でも私も元氣でその場所に居られた事に感謝しながら一日楽しく過ごしました。三味線の音に尺八鳴物ほんとうに日本人には合う音ですね。お身体に気をつけて下さい。急ぎましたので乱筆乱文ごめんなさい。みかん  
伸明が会社のお付合いで買った物です。(21) 幸三

すこしづゝ春らしくなつてまいりました。庭の紅梅満開、白い方はこれからです。みち様から法隆寺のおみやげやら、本のこぴーを頂きありがとうございます。確定申告作り終えましたら、手紙差し上げるつもり、よろしくお願ひ申し上げます。何をすることも日常生活の主婦仕事がある

のではかどりませぬ。

二月六日の我孫子新木のスタンプのあるお便り頂いてから何かと日が過ぎたことでしょうか。とにかく様々のことをしなければならぬ言いわけがましく申し上げるのも憚れますので、お礼も遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。(中略) 何もせず、お氣に入りの書を読んで過ごせると云う事はなく、日常の女仕事の間々に句を作り会報を作り予期せぬ来訪者長電話などぐとシヨリのくせに三十六時間あればと思いつく就寝は十二時が日常化時間の使い方の下手さに呆れております。小山さんにはとにかくあのような会報でお読みになれるかどうか、ご家族迷惑かとも思いつゝお送りしています。病氣はこわいですね。光成様も何かガラス細工のようで良い医療でこわれたり傷つかず美しく光つて頂きたく念じております。おしゃべりおめまだるいことゝお許し下さいませ。ごきげんよう。(21) 璃子

前略いつも楽しい句会を有難うございます。電機屋さんには教わりながらやってみました。今度はいま行くつたと思います。念のためコピ―も同封しました。よろしくお願ひします。草々(3.18) 昭七

右のとおり二月の鑑賞駄文をお届けします。何卒よろしくお願ひいたします。余寒どころか真冬を凌ぐ減多に

ない寒さがつづきます。呉々も御夫妻御身お大切に、御健吟下さい。

我孫子日記

(219 孝二)

1/24	SOA3
1/27	浄名院
1/30	更新試験
1/31	SOA4
2/3	陽一宅
2/4	公民館
2/7	SOA5
2/8	* 正受院
*2	2/10 薬師堂
	2/14 SOA6
	2/16 例会

\*針供養果てて針抜く一つづゝ

みち

針供養綿のおぼばの幟立て

高志

\*2 御開帳村人守る神将像

みち

開帳や薬師三尊十二将

高志

受贈図書・黒田杏子論―松村幸一 寂聴さんとともに②の  
 コピー十四枚(幸一さんより) 漢詩調の新風『虚栗』 暉峻  
 康隆著のコピー十八枚他日本古典文学大系三冊 頼原退蔵著  
 作集(健二さんより) 芭蕉諸文山口誓子著昭和廿二年富士  
 書房(宏之助さんより) 銀河鉄道の夜探検ブック 畑山博文  
 芸春秋(昭七さんより)

編集後記

投稿をメール添付ファイルやUSBで頂けるようになりまして、編集が楽になりました。更にメールでは郵送費が要りませんので節約も出来、なにより速い。どうかこの方法を試してみして下さい。文明の利器のアレルギーは気を変えれ

ば治ります。通信会社の宣伝をするわけではありませんが、現実の世の中の裏にインターネットという仮想空間が存在しているのです。古人の及びもつかない世界が存在するのが現代であります。ユビキタスという言葉がそのことを表しています。西行芭蕉蕪村一茶など歌人俳人が旅するのは、精神と実在との邂逅を目指したものでしょう。ものと記憶との対面・対話を求め思索を深めたのでしょうか。現代は先の仮想空間でもって居ながらにしてそのものに対面できるのです。既成観念にとらわれない自由な思想が開かれている現代をまことにありがたいと思います。そういうふうに思うようになりました。

白金霞 2月号(通巻第八四号) 平成三十年二月二十一日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・二二九 我孫子市南新木二二四・二七

☎・fax 〇四一七二八七一一〇六八

表紙の題字・加納綾女 同写真は平成二十三年三月四日のお台場の白金霞